

No.99

公民館だより

平成8年8月
宮津市由良地区センター内
由良の里
由良地区公民館

由良岳・森ヶ鼻道によせて(六)

館長 山下清一

今年、例年になく梅雨明けの雷雨大雨もなく、葵のピンクの花も咲き上り、何故か、すんなりと夏が来たようです。

由良岳の緑も一層濃く、樹木の見分けが出来ないくらいに黒ずんで来ました。炎熱の中、東西にどつしりと、少し澄まし顔で、どこまでも澄んだブルーの夏の海を心地よげに眺めているようです。

里の農作業も一段落の様子で、家の周りや、畑の夏野菜、花をつけた可憐な小菊や夏花が、暑い中にも私たちの気を和ませてくれます。

毎年梅雨明けの季節になると子供ころよく見かけた、「受たも漁」の光景が、梅雨明け前の風物詩として懐しく思いだされます。

梅雨前線の北上に伴う大雨で小川が増水すると、大川(由良川)から大量の、鮒・鯉・鯰等が産卵のため遡上して来るのです。水田や小川の水草に産卵し、引水に乗って急いで大川へ下って行くのを、待ち受けるのです。

夜来の雷雨と大雨で、森ヶ鼻川は濁流が手の届くところまで水嵩が増し、勢いよく流れ下っていました。

そは降る小雨の中、番傘を差しながらの登校の途中、森ヶ鼻道を石橋まで下って行くと、小川も田も水浸しで、道まで濁水が溢れています。

予期していたとおり、雨ガツパや蓑笠で身を包んだ顔馴染みの三四人の、「おっさん」達が、増水した小川の分岐点や水の落ちぐちの川巾一杯に、「受たも」を張り、下って来る魚を待ち受けていました。網の仕掛け場所

も、お互の諒解が出来ているらしく、いつも同じ位置に仕掛けてあります。私たちは暫く登校の足を止め、わいわいと、「受たも漁」に熱中しました。

生簀には捕れたばかりの、二三十糶の鮒が五六匹泳いでいます。

受けたもの上流一米のあたりに、六七匹の鮒が網を警戒してか、上流向きに泳ぎながら、こちらの様子を探っているようで、なかなか下ってこないのが、うす濁れの水を透して見られま

した。何かで、つついてみたい感情に駆られたのは、私だけではありません。それでも「おっさん」は静かに、辛抱強く魚を待ち受けていました。

このまま漁を見ていたい思いに駆られながら、上級生に急ぎたてられ、漁の「おっさん」達を羨ましながら、水浸しの道を急ぎました。

鉄道の踏切を越えると「えら川」の川筋でも、所々で同じ漁の光景が見られました。

下校時には、あれ程溢れていた水も減水し、朝の様子は跡形もなく、暑い陽射しが降り注いでいました。下り後れた魚が潜んでいないかなあと、未練がましく傘の柄で田や小川の縁をつついてみたり、「受たも漁」のことを思い思いの帰り道でした。

今静かに思い出しても懐かしく、何かこみ上げてくるものを感じているのです。

遠い日の子らの思いや通い道

平成八年度

由良地区公民館役員名簿

運営審議会委員

(順不同、敬称略)

由良小学校長

角尾 誠

脇自治会長

飯沢登志朗

宮本自治会長

小西 忠雄

浜野路自治会長

大町喜代治

港自治会長

千坂 久雄

下石浦自治会長

野村新左衛門

上石浦自治会長・市議会議員

山下伊佐衛門

前公民館長

小室 哲寛

学識経験者

四方 寿朗

由良小学校育友会会長

山下 良一

栗田中学校育友会会長

松林威佐雄

婦人会会長

山下よし子

老友会会長

平間 克己

子供会連絡協議会会長

大畑 忠夫

〔職員〕

公民館長

山下 清一

主 事

酒田 治

〔分館長〕

脇分館長

中西 衛

宮本分館長

升田 栄二

浜野路分館長(副代表)

中西 英貴

港分館長

森川耕一郎

下石浦分館長

野村 正和

上石浦分館長(代表)

岸田 秀樹

〔幹 事〕

(文化部) 部 長

岸田 国彦

副部長

北野 隆雄

土岐 正徳

田原 学

由利 昭弘

糸井 治孝

中西 夏江

大畑 忠夫

新宮 鶴雄

山下 浩二

大石 陽子

中西八重子

上田このみ

(体育部) 部 長

中西 隆光

副部長

小室 秀雄

小田原道子

由利 久典

浜崎 利雄

浜崎 智美

中西 一孝

尾崎 佳三

糸井 博之

瀬田 直子

川崎 清春

酒本 文子

蒲原 順一

山下 正貴

山下 初子

山下よし子

有田 幸子

岸田 成子

〔講師〕

(文化部) 中西 俊夫

(体育部)

小室 文雄

北野 薫

岸田 剛

玉垣 泰子

平成八年度 由良地区公民館行事

〔文化部〕

・盆踊り大会

八月十四日

・芸能サークル発表会

十月二十七日

・文化祭(婦人会と協賛)

十一月四日

・人権学習会

一月十九日

・区民囲碁大会

二月 二日

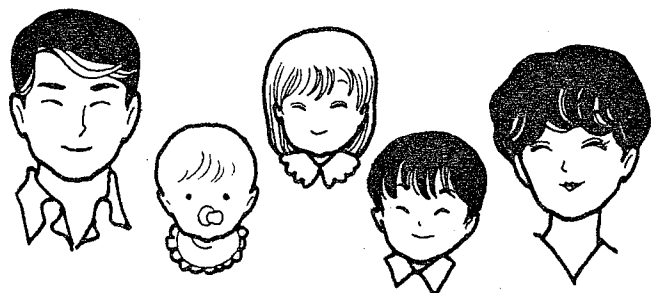
・自治学級

二月十六日

・生涯学習講演会

(婦人会と共催) 二月二十三日

・生涯学習講座



・(高齢化社会懇談会) 年一回

・由良歴史年表編さん事業

・(各地区訪問聞きとり懇談会)

周年

・歴史の館ネットワーク事業

・(歴史をさぐる会) 毎月十日

・公民館だより発刊

四月・八月・十二月

〔体育部〕

・由良岳登山(第三〇回)

四月二十九日、雨天五月三日

・第八回宮津市地区対抗駅伝競走大会

六月 三日

・地区対抗キックベースボール大会

(ナイター) 六月 八日

・団体対抗

男子ソフトボール大会

(ナイター) 六月 九日

・みやづビーチバレー!!'96

八月 四日

・球技大会(野球、ソフト)

八月十四日

・区民グラウンドゴルフ

(ナイター) 九月二十二日

・宮津市市民駅伝競走大会

十一月三日

・宮津市婦人バレーボール大会

(十八回)

・市民卓球大会(第十四回)

十二月一日

・四部対抗男女バレーボール大会

二月 二日

◎以上平成八年度の事業を、分館長さん、文化部、体育部の役員さんと共に進めて行きます。皆々様のご支援、ご協力をよろしくお願い致します。

行事報告

●由良岳登山

四月二十九日(日)

登山前になって来ると、週間予報が気になって仕方がない。やっと二十九日の予報が出、晴れマークになると気持が落着き、一転二転する天気予報に入る日々です。

当日は早くより沢山の方が参加していただき、毎年、松原寺様よりご寄贈の菓子も見る間に品切れの状態になりました。お天気は上々、長い列が国民宿舎上の林道の中へ次々と消え、あとは頂上へ頂上へと続いて行きます。

小さな子供さん(三才〜四才)と共に登山されている、お父さん、お母さん。お父さんがおんぶしてブルブル汗をかき乍ら一歩、一歩。孫のお供のおじいさ

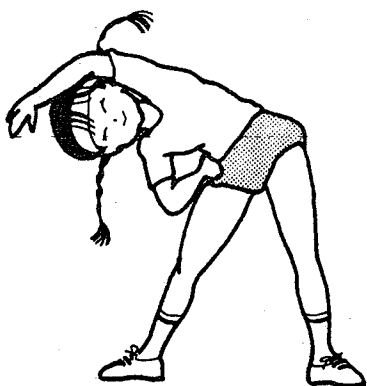
主事 酒田 治

ん、おばあさん。

!!驚きもの木!! なんと総勢一七八名の方が由良岳の頂上を目指して!!エンヤラコラサ!! 頂上の方は昨年続き西ノ嶺を更に広く遠く天橋立、真下にエネ研と見渡しが出来るすばらしい場所を作っていたいただいた関係機関の方々に厚くお礼を申し上げます。

なお今年、公民館も少しもお手伝いが出来たらと、由良岳頂上より国民宿舎までの距離、分岐点より由良岳頂上及び西ノ嶺まで、官行造林より頂上一〇〇〇米の間に杭による道標を所々打ち込みました。

おわりになりましたが、今年も素晴らしいお天気に恵まれ、松原寺様、観光協会、民宿組合の方々等多くの方のご協力を得、



参加された方、実に一七八名の多きに至り、公民館の由良嶽登山三十回記念に花を添えることが出来ました。どうも有難うございました。



由良岳登山記念スタンプ

標高六四〇米

(由良嶽録の一部)

愛しい雛を守る母鳥の如く
由良岳の裾野が集落を
大きく包んでいる。

●第八回宮津市地区対抗駅伝競走大会

六月二日(日)

わが由良チームも連日のトレーニング、大会前の区間の試走と練習を重ねて参りました。当日は雨が心配されていました

が、絶好の駅伝日和となり、由良小学校グラウンドを出発点とした南部地区、日ヶ谷小学校グラウンドを出発点とした北部地区、南北合せて十五区間。四十二・一九五kmの熱戦が展開されました。

由良チームも、昨年に引き続き、泉 昌雄君が区間賞を取るなど健闘されましたが、総合五位と、昨年と同じ順位となりました。選手の皆様にはお忙しい中、長期間のトレーニングをお願いし、ご家庭では温かなご理解とご支援を賜わり、大会当日は、交通安全協会、消防団のご協力、地区の多くの皆様のご声援を得て無事に大会が終了しましたことを厚くお礼申し上げます。

●女子キックベースボール

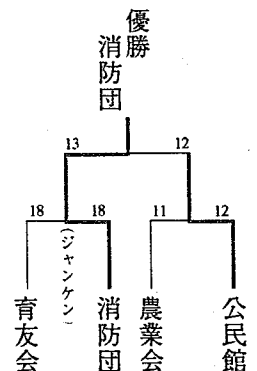
(四部対抗) 六月八日(土)

分館長さんをはじめとして、各地区で選手をお願いしていましたが、生憎の雨で中止となりました。

●団体対抗男子ソフトボール

(ナイター) 六月九日(日)

昨夜とはうって変わったナイターのさわやかな空気の中で、和やかに試合が行なわれ、消防団チームが優勝を飾りました。



たくましさ求めて

由良小学校長 角尾 誠

日頃は幼稚園、小学校教育の推進に当たりまして、ご協力、ご支援を賜り、誠に有難うございます。

さて、「たくましい児童の育成」という言葉をよく耳にします。本校の教育目標も「豊かな心を持ち、たくましく生きる児童の育成を目指す」と掲げています。

今の子供達は、ちょっとした失敗や注意ですなったり、ごねたりすることが多い様に思いますが、

即ち、耐える力を持たないものの子供が多くなっているのではないのでしょうか。以前、「腕白でもいい、たくましく育ってほしい」というコマージュナルが流行したことがありました。

しかし、たくましさは認められても、本当に腕白でもよいと言いつけるものでしょうか。「少々の怪我など気にしなくてよい」

「勉強など出来なくてもよい」「先生に叱られるぐらいの子供でよい」

等の会話をよく聞くことがあります。確かに、その通りと言えらることもありますが、この腕白がいかに他人に迷惑をかけているかを忘れてはなりませんし、いかに友達を苦しめているかを知ってほしいと思います。

友達の間で真面目な発言を冷やかすし、失敗をあざけり、学習の規律を乱していることも多いので

人間は人とかかわり合いながら生活しているのですから、自

分さえよければよいと言う考えを捨てさせることは大切です。体は強くなくても自分を律し、弱者の味方となり、人の立場を尊重するそんな子供の育成を図りたいと思います。

たくましさは、外面でとらえるのではなく、心の強さではかるべきものだと思います。

腕白者が横行する社会、正直者が馬鹿をみる社会にはしたくありません。

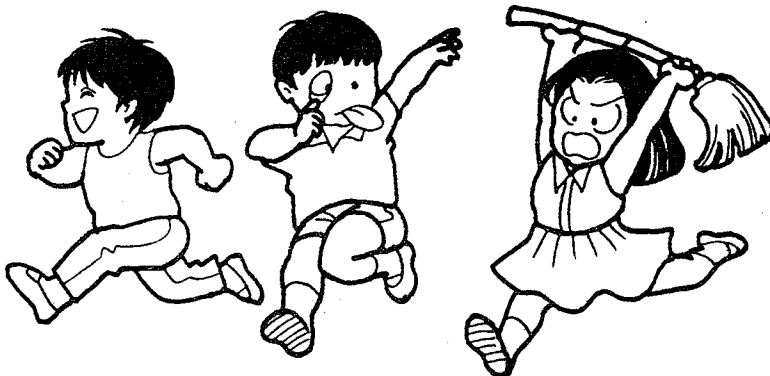
一人一人が大切にされ、その能力が発揮できて、生きがいを感じる日々をみんなで作りたいものです。

子育てや教育を取り巻く状況は、日々難しくなってきました。

そのため、学校と家庭・地域社会は、それぞれの役割を検討・分担し、確かめ合いながら指導を進めなければならないと思います。

二十一世紀を主体的に生き抜くたくましい力と優しい心を持

った子供の成長を目指したいと思っております。力量不足ではありますが、精一杯頑張りたいと思っておりますのでどうか宜しくお願い致します。



ご挨拶

栗田中学校 校長 安田 宏 幸

連日厳しい暑さに蒸されるころになりました。

さて、私こと、今春四月栗田中学校勤務を命じられ、前任校の養老中学校より当校に着任致しました。

不安にもまして、浅学非才な私が、重責を全うする事が出来るのか、自問しながら緊張もしています。

私は三十数年の間、府立加悦谷高校・峰山高校・橋立中学校・養老中学校と転勤する中で「まず聴く」という事を学びました。

おそらく誰もが、頭ごなしの親の説教に反発した子どももの時代、一方的な先輩の言動に批判の目を向けた後輩の時代を経験しただろうと思います。にもかかわらず、自分が親の立場、先輩の立場に立ったとき、とにかく

くその体験を忘れ、若い人たちに同じ態度で接してはいないでしょうか。

親も先輩として、子どもや後輩に自らの意見を述べ、力強く導いて行くことは、もちろん大事です。

しかしその前により大事なのは、まず若い人達の意見をよく聴く事であると思います。人生の一先輩として相手の身になってその言うことに十分耳を傾ける。そうしてこそ若い人にも、聴く気が起こります。若い人たちに迎合しようというのではありません。こちらの思いを伝えるために、頑固おやじのような一徹さも一面で必要でしょうし、まず相手が心をひらくよう、自らの体験と知恵をもっと生かすことがより大切だと感じていま

す。

このような事を思いつつ社会の変化に対応した新しい学校運営を図り、公教育に課せられた使命と責任を自覚し、地域の人達の期待と信託に応えることが何よりも重要であると思っております。

今後ともよろしくご指導の程
お願い申し上げます。



由良老友会について

平間 克己

今回図らずも、未だ任期中の中西吉之助会長の辞任により、後任会長の声に、浅学非才の私には不適任と辞退致しましたが、強いて会長就任を要請され、受託の止むなきに至りました。

今後はこの大任を果す為には皆様の暖き御指導と役員各位の御援助を賜わらねば、目的を果す事は出来ません。よろしく御引立ての程願ひ上げます。

さて、高齢者の問題は「生き甲斐と健康造り」にあり。その事により「寝たきり老人の運動」に発展して行くのは当然のなり行きです。その為にも私達由良老友会は皆様に喜ばれる老友会でならなければなりません。その意味に於きまして、年間の行事を申し上げ皆様の御理解を得たいと思います。

① 毎年二月より翌年五月迄、由良駅の待合室に長椅子に合せ、手製の座布団を敷いて、寒い冬場の時間待ちの人に座って頂いています。その奉仕も早十年を経過しました。

② 毎年十二月末日には老人ホーム慰問を続けています。宮津の天橋園、青嵐荘ホーム、正月に食べて頂くため、由良みかん二箱ずつ持参いたします。ホームの老人達は楽しみに待っているそうです。

③ 赤い羽根運動は勿論、災害地には義援金活動を起しています。

④ 一人暮らし老人の家庭訪問をし、相談に応じています。

⑤ 老友会員の男子会員の料理教室を開いています。

⑥ 老人大学に学び視野を広め

ています。

⑦ 由良小学校との交流

四月の入学式には、老友会よりピカピカの一年生に入学祝いとして、ノートと鉛筆を贈っています。

六月に祖父母学級を開いて頂き、小学生の孫達の授業参観の後、私達老人の小学生頃の遊びを再現して頂き、楽しい時を過ぎました。竹細工、百人一首、お手玉、温故知新の意味を含んだ祖父母学級はすばらしい。

九月には運動会の玉入れ。十月には、六年生と老友会のゲートボール場での競技等、楽しい交流があり、別れには、中学校へ入学しても使えるシャープペンシルを記念にお渡しをす。

こうした交流があつて、家庭での祖父母に対する思いやりが円満な家庭となつて行くのではないでしようか。由良小学校に厚く御礼を申し上げます。現在由良老友会会員百人です。

役員の方は十五人で、各自治会毎に連絡し、お世話をしていきます。役員の方、皆さん良い方で、会員の方のお世話して頂きますので評判が良く助かります。特に宮本地区の役員さんは熱心で協力して頂いています。

由良地区の六十五才以上の皆様、由良老友会に加入して「残りの人生」を楽しもうではありませんか。毎月十五日は午後一時より、憩の家で茶話会を開いています。おいで下さい。憩の家を利用して、碁の会、マージャンの会等開いています。尚、今後はスポーツにも力を注ぎ、体力づくりに力をいれたいと思っています。



吹かそう十人十色の風を！

由良婦人会 会長 山下 よし子

Good evening, all ladies! Glad to see you here. I'm Yoshiko Yamashita.と元氣印の私が挨拶をした日より早く、四月九日の理事会を皮切りに私達役員には責任の重い行事や会合がいくつもありました。理事というのは例年通りといえば悪い表現になります。市・府婦連の事業計画を地区に持ち帰り、地域の役員と協力して、会員に呼びかける役です。言いかえると、諦めて役を引き受ける羽目になった地区の役員が、代表としての立場でほぼ決定された事業内容の実行に役割参加する仕組みになっています。この仕事は会員減少の要因の一つになっているようにも考えられます。しかし現場に入ると、大人数をまとめるためには少人数の個性的な主張は呑ま

れがちになるのも仕方がないと思われてきます。本部の役員は孤軍奮闘が見えるだけに気の毒になり、地域婦人会の長として多過ぎる出番を嘆くのは、少し甘すぎる気にさえなります。市と府婦連の長として、忙しく実践活動をしておられる会長の姿を見ていると、微力ながら努めようという気になってきます。参加し企画に当れることを役得だと思わず少し楽になります。代表として出るので、社会的で積極的な自分を押さえて、会員の都合を優先させようと思っています。自分の意見も言っています。それらが多数に押されて、不平不満を言うこともあるでしょうが、由良の会員の負担を少なく、得るものを大きくという責任意識は常に持っていたいと思います。私は地域性ということから婦人会活動には早く

から参加し、体験も沢山しております。歴代の会長のその年々の時々の活躍振りを近いところで見ながら、会をまとめて前向きに取組む姿勢も十人十色だと体感しながら学ばせていただきました。いい点はしっかりと引き継ぎ、改める点は率直な意見交換を続けながら今にあわせていこうと思います。平成八年度の役員を中心に、会員が団結して盛り上げる組織づくりを心がけます。私を少し主張して、雑談の出来る雰囲気の中で、一人ひとりが積極的に関わり、自己の向上を密かに期待し、楽しく交流の輪に加わり、いつのまにか関心の対象が外へ向き始めていたというのが理想です。定年制のために、人生経験の豊かな女性たちと同じ輪に加わることが少なくなることがとても残念です。男女は年相応に成長を続ける点からも、より多くの人たちと一緒したいのです。団体行動で身につけたものをその

年年の輪と和だけに止めずに、年代や地域を超えた女性の社交の場で、二重三重の輪に広げることが出来れば最高です。和氣満々が競いあいになり、誹謗になつてしまうことがありません。適材適所で自分を生かせるそんな会が望まれます。荒巻京都府知事の言葉にあるように、新しい時代の風に向かって地域が動き出す。そんな地域づくりがしたい。迎える高齢者社会を楽しく支え合って生きるためにも、進んで生涯学習の場へ足を運びたい！与えられたチャンスを自分の手で掴みたい！女性の元氣を他人のために生かしたい！と次々に願望が膨らみます。女性エンパワーメントする年です。無理をしないでやりましょう。という栗田会長の声が聞えてきます。「言うは易く行なうは難しい」と今の私に言われているような言葉です。大好きで日々のモットーにしています。サンキュー。

子供会長は若葉マークです

由良地区子供会連絡協議会 会長 大畑 忠 夫

私、本年度の子供会連絡協議会会長を任せられました。

各地区優秀な方々がおられる中、今年は港の順番という事で、無力ながら引き受けた次第です。引き受けてみて、これは大変と思いました。

自分の地区の子供会のことと良く判らないのに、宮津市青少年連絡協議会の幹事ということ、役員会、由良各協議会、役員会出席と超多忙です。

又、この夏休みに向かつて、地区の子供行事、協議会の行事等、計画があり、各地区長・前会長さん及び先輩方の指導で、なんとか行事を消化出来ているような次第です。

各地区会長さんともども、宮津市子供会推進委員ということ、市長から任せられておりまして、子供達の活性化をはかる

よう委任されていますが、どう取り組んでよいのやらよくわかりません。

なにか新しい事に取組むのと父兄の負担が多くなり、やろうと思う事はいくらでもあるが現実ではなかなか出来ません。

教育委員会の先生方に、色々子供会活動の話聞かせていただきましたが、由良の子供会活動はなかなか活発であるとの事です。

これからも宮津市青少年協議会、地区子供会等の行事がありますが、前会長・先輩達のご指導ご協力で頑張っていきます。

後になりましたが、自治連合会・各団体・子供会会員、役員の皆様方に、多大なるご支援ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

宮津地区対抗駅伝に参加して

林 郁 夫

「ただ今から2次コールドを行います。」中継所にいる選手が入れ替わりチェックを受けに来る。その中にはアップの途中の者もいる。前の区間の走者は見られないが緊張が少しづつ高まってくる。

私が走る喜びを覚えてから、かれこれ十数年になる。もともとと不器用で、特に技術も知らず、ただ走るだけである。景色の変化を楽しみながら、ゆっくり流す。ときには体のリズムにまかせてスピードを出す。距離を踏めば、気持ちも大らかになる。仕事で溜まったストレスも、帰る頃には和らいでいるようだ。そうなるのと走らないではいられない。

毎晩、由良小グラウンドに野外灯がつく。小学生から大人まで熱心に練習する。練習を指導

する者あり、応援する者あり。独りでの練習と違い、連帯感が生まれ、そのためか強くなった気がする。こうして、駅伝のときにたすきを繋ぐことができる。

由良にお世話になって二年。駅伝のメンバーとして二年になる。今年は十分練習に加われなかった。にもかかわらず、重要なコースをまかせていただいた。

南部コース2区。当日の応援の多さに励まされる。コースは変化に富み、きつかったが、たすきを無事に繋ぐことができた。ただ一人も抜けずに迷惑を掛けてしまった。

駅伝でなければこの心地よい緊張感は味わえない。駅伝を通じて、由良地区の良さを知った。

駅伝

川崎 裕介

六月二日、三区四キロを走り終え、第三中継所についてポカリスエットをもらいました。そして缶を開け飲んだそのポカリは去年以上においしいものでした。

その日はちょうど中間テストの間の日曜日でした。別に走った結果にテストは関係ありませんでしたが。

大会前日にコースを視察に連れていってもらいました。はじめの二キロは海岸沿いのジグザグ道で、残りの二キロが見事な直線でした。家などが並んでいれば良かったのですが、周り一面が田畑。気が狂いそうでした。その日の夜、特に思ったのは「区間賞取ろう」というのはほとんどなく、「一応次の人にわたせるように走ろう」でした。

そして当日、開会式が終わり、

バスに乗って第二中継所まで行きました。アップを始め、一〇分前までになりました。

トップの人がチラッと見えましたが、由良ではありませんでした。

だいぶしてから、二区の田中君が来ました。そしてたすきをもらい、走り始めました。

走り始めて一キロぐらいの所で一人ぬきました。そして「二人目」と思いましたが、前方に一人も見えませんでした。

二キロを終えて、長い直線に入っても前に人が見えませんでした。直線を百メートルほど走っただけで一気に疲れしました。「どこまで走ったら終わるんや。」と生きてきたりしました。

残り一キロぐらいの所で祖父と祖母が来ていました。それで疲れがとれたような気がしまし

た。でも、五十メートルほど走ると疲れがまた出てきました。

前後に誰も相手がいなかったので、マイペースで走ることができました。

次の走者の人にたすきをわたして横にあった坂で座り、「あー、走れた。」と思いました。

今、アトランタオリンピックがアメリカでされていますが、そこで四二・一九五キロも走るマラソンの選手はすごいと思いました。僕が走った距離の一〇倍以上をすごい速いペースで走るので、話になりません。でも、走り終えた後の感じはいつしよだと思えます。だから、今度出る時があれば、もつと楽しく走ってみたいと思います。



駅伝

六年坂 下容子

由良ヶ岳登山

峰山町 尾畑重美

私は、今年初めて駅伝に出ました。

がんばって走れるようにと思ったので、練習は毎日行きました。私の走るきよりは一・三kmです。短いけど速く走らなくちゃいけないからバテバテでした。

何回走っても、タイムが上がらず四分ちよつとでした。

けど、津田のおじちゃんに「前の人に付いていけ」と言われたので、しんけんひつついていくと三分五〇秒になって、二〇秒も速くなりました。

私は、この時、少し自信がついてうれしかったです。

本番、とつてもきんちょうしました。ドキドキしながらバスに乗って走る場所に向かいました。

すると、私の知っている人が五、六人もいて、「どうしよう」と思いました。ちよつと体をあたたためるけれど、走っていると足が少し痛くなりました。

「どうだろ、走れるかな、ぬかされたらどうしよう」と考えてしまい、ますますドキドキしました。そう思いながら集まると少しして、「由良」と言われました。その時、たすきをもらった。がんばるぞと思つてしんけん前を向いて走りました。すると、そのままの順序だったけど自分では走れたと思いません。

みんなで、がんばって走れてとても楽しかったです。

若き頃、もう二十年前、先輩が語ってくれた由良ヶ岳登山の話。あれからずつと一度は登ってみたいと思いつつ、車窓からながめていた山について登った。

海拔ゼロメートルから、いきなり六百数メートルへの登りは、雑木林から針葉樹林帯へそして視界の開けた尾根へと続く。

頂上は直下に由良川や日本海が広がり、海風が快く疲れを癒してくれる。また、山頂には社があり、何とも本格的な登山のようだ。

私は、昨年青葉山や高龍寺岳（久美浜町）に登ったのに続き、ふるさとの山を一つずつ登りたいと思つている。体力を確かめながら郷土を知りたい。



誘ってくださいだった中西さんありがとう。四月二十九日の登山を継続してください。また登りましょう。

川柳

幸せの接点子らに膳はずむ
衿章に白い齒きらり帰省の子

藤本喜代子

由良の歴史をさぐる会 四方 寿朗

終点を悔いない蟬は今日も鳴く
サーフボードうねりに青春を謳歌する

坂本 妙子

ふるさとへ心を誘う盆が来て
戦争の輪廻を越えてこの平和

山田 寿美

子等にやる楽しみ胸に梅漬ける
孫たちとはしゃぐ花火に宵の星

山下 節子



郷里に於ける澤井市造話題 (十四)

作 中西孫兵衛 (先々代)

「夕べの話の物だ金の無い和尚だから近所で時借りして居るか但しは京都の衣屋に借りて来たのであらうから早く返済させよ」と云はれましたから請取るや否や其儘和尚に渡しました是即ち寄附物書に記載し置ける品なり

今に於て「賞められて寄附を得た」として頼る逸話になって居ます

其二

葬式も滞なく済み其翌夜親類会議を開くに付君も立合よとの事は血族関係がないからと辞退せしに「イヤ一個の立役者に當って居るから役者が打揃はなくては芝居が出来ぬ」といふ事で私も其席に加はる事になりました其問題左に

翁の保護之事を留主させる事に私に委任を托する条件でありました

第一翁は大坂に引取りたしといふのであるが翁は之を肯んじられぬ私は其の中間に立ち仮りに七月迄猶豫して八月初旬より大坂に引越す事に双方共に承諾して貰ひました

第二家屋は當分此儘として川崎国太郎母おもとに留主を托すといふ問題可決す

第三私を以て沢井君に代りて郷里親戚の事柄は凡て指揮するの権限を付与すべしとの事に付し親戚一同の意見を徴すといふにあり否委任するに付此旨相心得べしとの命令的報告せらるる以上命令的の報告に誰かは異議の狭まるべき私は微力にして其任に

耐えずと自覚し辞退せんかと思ひしか沢井君の気質として放ちたる矢を再び弓にする人でなし且つや彼に是に碎心せられつつ稍激昂の色も灰見えしかば潔く御請は致して置きました此時の状況は親類衆御存なれば御話申す必要はない

郷里も一段落となりて沢井君は帰阪せられ其節乗り行かれたる車夫が舞鶴駅よりとして持ち帰りたる手紙の要件は大森慶蔵氏所持に係る竹田筆立達磨蕪村筆の一休和尚図の二軸御本人も良品にあらずと承知の上少し訳がありまして台北へ郵便小包にて送れとの事依て早速に送りましたから其代金も届きまして大森氏に相渡しました

其軸物は今に台北に存るやら外に遣はされた事歎其話は致さずして済みました

其三
明治四十五年三月に要談がありまして大阪へ面会に行きました序に昨冬氏神へ寄附金の高は當

時以心伝心互に赤心を人腹中に推せるに止まりしが今日は互に相對して意中を明示して確定せば如何と云へは諾矣と答えらる私より先づ其額は

金壹千円ならんと申しましたらその通と答へられました私は今少し増して呉れよと申しましたら何にするかとの尋でありましたから寄附標を右に刻み永久に保存する積なりと申しましたらそれは藤吉に指図してやらせ呉れよ代償は此方より支拂ふからと申されました

其四
小室の宅の留主居は兎に角一周年忌までおもとに托し置き呉れといはれました

其五
松原寺詞堂金は必要次第電報せよ折返し送金すると申された

其六
自身の屋敷買入は當秋由良に行き取定むべしと申された君は私に何日帰国する歎と問はれしかば明日の積りなりと答え

しに「乃公も明後日の船にて渡台すべし萬事は此秋を期し由良に行き相談して定むべし乞ふ其積りにて待てよ」と

呼々「萬事は此秋を期して由良に行き相談して定むべし乞ふ其積りにて待てよ」此一語今尚恍惚として耳朶に存せり之果して君と終生袂を別つ最後の言とは神ならぬ身の知る由ぞなき我が莫逆無二の友よ肝胆相照せる知己よ豪胆不羈遂に一世の覇業を完ふせる畏友よと天地に叫號すれども杳として応へず今や幽冥空しく境を隔つ偶々往事を追懐すれば君の声客彷彿として耳目に実現せり嗚呼人世は夢なるかな

身をこかす 夏のあつさをしのばせて
今は芭蕉のかけにひそみぬ
夢なりき三年のむかし君とわれ
契りし事の甲斐なかりけむ

完

平成三年以来十四回にわたつて、私が紹介して来ましたこの連載は、一応終りとなりました。次正大正四年澤井組本店から発行された澤井市造翁の伝記から、澤井翁工事表を転記します。

澤井翁工事年表

自 明治十二年十二月
至 同 十七年十二月

北海道手宮幌内間鉄道工事に従事、札幌居住

自 明治十七年十二月
至 同 十九年 五月

碓氷峠人山線鉄道工事測量に従事、軽井沢居住

自 明治十九年五月
至 同 二十年三月

旧日本鉄道宇都宮白河間鉄道工事に従事、宇都宮居住

自 明治二十年三月
至 同二十一年四月

東海道線静岡掛川間鉄道工事に従事、静岡居住

自 明治二十一年四月
至 同 二十三年九月

大阪奈良間鉄道工事に従事、大阪居住

自 明治二十三年九月
至 同二十五年十一月

北海道炭礦線岩見澤砂川間鉄道工事に従事、北海道居住

自 明治二十五年十一月
至 同二十六年 九月

山陽線鉄道工事に従事、大阪居住

自 明治二十六年九月
至 同二十八年五月

北陸線敦賀福井間鉄道工事に従事、敦賀居住

自 明治二十八年五月
至 同三十六年六月

台湾鉄道総督府官舎基隆築港等諸工事に従事、台北居住

自 明治三十六年 六月
至 同三十七年十二月

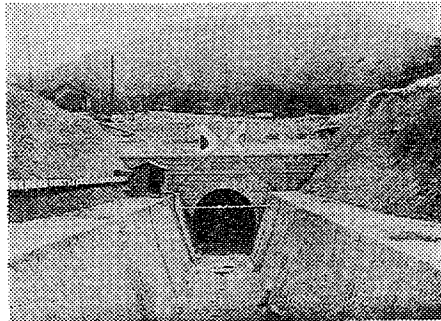
福知山舞鶴線鉄道工事に従事、舞鶴居住

自 明治三十七年十二月
至 同四十一年 七月

東清鉄道韓国鉄道山陽鉄道等諸工事に従事、大連及び大阪居住

自 明治四十一年七月
至 同四十五年七月

台湾各種工事に従事、台北居住



宇治川電気会社第一号隧道

つれづれに

山口美子

山道の光とどかぬがけ下に白さ目にしむどくだみの花

わが腕のこまかき皺に驚きぬきようはしきりに蝉しぐれして

スタンドのあわき光にときめきて藤織り織りし人に魅かれる

音もなく降る雨の中あじさいは逝きにし夫の思い出の花

ほんやりと流れる雲をながめつつ牧水のうたの思い出される

牧水のうた語り合ひし遠き日よふみ月の空にその歌を恋う

牧水のうた想うときこの夏の海はますます青く光るなり

※若山牧水(わかやままきず) (一八八五—一九二八) 歌人。本名、繁。尾上柴舟に師事し、前田夕暮、北原白秋、土岐善磨らと文芸誌の編集、発行をした後、二十四才から次々と歌集を出版、更に散文集、紀行文集、随筆集なども出版する。自然主義歌人として、一時代を画した。幾山河こえさり行かば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく多くの人に愛誦された一首。

文学の見える風景(十)

上田三四二「夏行」その三

中西夏江

P 64～65 丹後は気象の変化のはげしいところである。由良村は加佐郡だが、加佐は傘からきていると言われていた。

「この地方のことわざに、弁当忘れても傘忘れるな、というのがあつた。——略——

雨でないかぎり、香村と高岡は岸田弥生と井口澄江の二人を誘って夕べの散歩に出た。その日、彼らの足は、はじめて川沿いの丘に向かった。買物を兼ねたので、香村も高岡も、額紫陽花の咲く農家で頒けてもらった生卵の袋を抱えていた。

※ この頃は、「地玉あります」と書いた貼紙を出して、新鮮な卵を売っている農家が見かけられました。

丘は斜面を蜜柑畑につくつて、背丈ほどの濃緑の木々の繁みが始まると、葉かげに小さな青い実をはぐんでいった。細い坂道の其処此処に山百合の花がいくつも咲いていた。

P 69～71 浜は海水浴客のための小屋が組まれはじめていた。骨組だけの小屋のほとりに、幾台ものボートが伏せられて、ペインキの塗りかえがはじまっていた。一様に古ぼけた腹をかえす中に、純白と真紅に塗りわけた一艘が、盛夏のそこに来たことを告げていた。香村は昨日、卵を買いに通りに出て、村の家々が腰板を塗りかえたり、植込みの手入れをしたり、風鈴を吊したり、屋号を書いた看板を出し

たりして、宿屋らしい様子に変つていくのを見ていた。一軒ある雑貨屋は水中眼鏡や浮袋をたくさん掛け並べ、「海水着入荷、大中小」と墨で書いた貼紙を店先に出していた。十台ほど機械を入れたパチンコ屋もできていた。河口の西側に遠浅の広い砂浜をもつこの海辺の村は、にわかには夏の海水浴場としての顔を整えつつあつた。——略——

※ 香村たちは、栗田まで歩きながら、桃島のあたりまでやつてきて、松の梢越しに、白い煙をみます。

「何だろう？」
「浜焼きですよ。」

妹尾が目陰をしながら言った。浜に村人たちが出て——略——眼下の磯は海に向かって、岩が群がっていた。はざまの水は蒼く澄み、絶えず揺れ、或るところでは泡立った。沖合の岩にはげしく打ちあたる波の飛沫が目覚ましい白さに輝いて空にく

だけ、岩を越える波は幾筋もの滝になり、海石はそのめぐりに止むことのない白い波紋を湧かせていた。

波の音が彼らを撃ちつづけた。この複雑な岩組と、そこに現われては消えていく無数の波の営為と、そしてその向こうにどこまでも拡がる蒼い海——香村は目の前の眺めを地質時代にまで還そうと試みた。もちろんそんな想像がやすやすと働くわけではないが、昨日も一昨日も、彼がまだこの地を知らなかった一カ月前も、彼が生れていなかった三十年前も、百年、千年の過去も、ここに同じような水の蕩揺があつたと想像することには彼のふさぎにかたむく気分を開放した。香村は海になだれる崖に枝を張る黒松を、健気とも、頼もしいとも思う気持になつていた——略——

※ 一行は、栗田から列車で研修所に帰って来ます。

その日の夕刻、いつものように四人して浜に出た香村は、大雨のあとあれほど汚れていた浜が見ちがえるほどきれいになっているのに驚いた。

※ 浜掃除の焚火の跡の灰の堆積には、まだほとぼりが残っているの、四人は、竹や板切れや枯草などを燻の上におろします。炎になります。

P 72〜76 東の山の上の空に月が出ていた。―略―

「ね、歌いましょう。」

井口澄江が岸田をうながした。二人は歌い出した。

あした浜辺を さまよへば
昔のことぞ 偲ばるる

風の音よ 雲のさまよ
よする波も かいの色も

細い歌声は風に乗って流れていった。

炎は、岸田弥生の赤い鼻緒の足許よりも彼女の浴衣の胸のあたりをいつそう明るませ、かげろうのように、頬にもたわむれ

た。岸田弥生は井口澄江により添って、もたれかかるようにして歌った。

ゆふべ浜辺を もとほれば
昔の人ぞ 偲ばるる

……

二番を高岡も一緒に歌った。

香村も、歌詞があやしかったが、隋いで歌った。月が雲間を出ると、浜は月の夜になり、波音を寄せる海は沖にかけて明るんだ。しかしそれも東の間で、月はまた雲に入って、渚は焚火の

明るさの範囲をおしついで闇の世界をひろげていった。澄んだ女の声は、波音にまぎれ、風に逆らいながら、焚火の保つ明るさの範囲から、悲哀を引いて、暗い海の上にも流れた。

まぶしい光の季節がおとすれた。
海の色が濃くなり、打ち寄せ

る波の白が冴え、夏雲が沖に立った。旺んな雲の峰の下に、冠島が海よりも濃い藍の色を浮べていた。

浜には葭簀張りの海の家が三軒、軒をならべ、「氷」の字を白に染め抜いた旗を吊す飲食店も出来た。飲食店は横手の葭簀の壁に寄せて、パチンコの台を四五台並べた。

由良駅の変わりようにも香村は目を瞠った。駅前に「歓迎」と書いた大きなアーチが作られ、そばに、同じ水色に塗った負けず劣らずの大きな柱が建って、

由良の門をわたる舟人かぢを絶え 行方も知らぬ恋の道かな

と百人一首で有名な恋の歌が白いペンキで書かれた。駅から真直ぐに延びる大通りは、両側に雪洞ゆきほらを連ねている。

「由良の門をわたる舟人」の由良というのは、ここでしたかね。何だかちがうような気がするなあ。」

高岡が疑わしそくに柱を見上げた。由良の地は紀州にもあり、地名としてはそちらの方が知られていた。

「さあ、どうでしょうか。やっぱり紀州とする方がおもむきがありますかね。」

香村は、おもいがけない風雅な恋の歌を駅前に見出して、虚をつかれる思いだった。歌はけげばしい駅前の装いに或るなまめいた気分を与えていた。鄙びた海辺の村が歌枕の地であることに、香村ははじめて思いついた。―略―

「それにしてもやるなあ。」高岡はよほど「由良の門」の歌の柱が気になるらしく、またその大きな柱を振り返って見上げた。「ついでに、山椒太夫の宣伝もやればよいのに。」

※ 香村たちは二、三日前に山椒太夫の屋敷跡を訪れたのですが、傾斜のついた草原に「三庄太夫遺跡」と彫った石が立っているだけで、一軒の藁屋も山椒太夫の屋敷跡とは関係がなさそうであり、すこしがっかりして帰って来ていました。
(以下、次回へ)

編集後記

公民館だよりも次号(十二月)の発刊で、百号の記念号となります。先輩・役員諸兄のご努力と、お力添えを下さった多くの方々のお陰であり、皆様と共に喜び合いたいと思います。

記念号に相応しい何かをしなればと、話し合っているところですが、皆様のご意見や試み等、お寄せ下さい。

(追記) 今春の由良岳登山は、好天に恵まれ、百七十数名の方々の参加を得て盛大な三十回の記念登山となりました。西嶺からの橋立、丹後半島の眺望は、筆舌では尽せない景色でした。帰路、頂上からの里程を巻尺にて測り、有り合せの木杭で、頂上までの里程標を設置しました。

(山下 記)

